横浜市立 西柴小学校　　学校評価報告書　　（ 令和 7 ～ 9 年度 ）

重点取組分野	令和 7 年度 具体的取組	令和 7 年度 自己評価結果	総括
授業改善	①各単元や各授業の中で、「主体的・対話的で深い学び」の子どもの姿を想定し、それに迫る手立てを考え、子ども自らが学習の方法や場を選択し、考えを説明し合えるような仕掛けの工夫を考える。②重点研究テーマや学校教育目標の実現にむけて、自分の思いを表現したり伝え合ったりする子の育成をめざす。	①自分でノートやタブレット、マナボードなどの表現方法を選択したり、学び合いの場をグループ・個人・先生などと選んで課題解決できるような授業を心がけてきたことにより、自分に合った表現や学びの場を選択して主体的に学習に取り組もうとする姿が見られるようになった。②自分の思いや考えを伝える場を設け、経験を積むことで学校目標や重点研究テーマに迫る子の育成につながっていると考える。	B
道徳教育	①豊かなかかわりの中で、自分を大切にし、互いの生き方を認めていく子を育てるため、道徳科を要として学校の教育活動全体を通して行う道徳教育を推進する。②道徳科年間指導計画に沿った、全学級の道徳科授業公開を年一回以上実施する。③自分の考えを書いたり、話したりすることや友達の考えを聞くことを通して、自分自身の見方・考え方を見つめたり、なりたい自分をイメージしたりすることができるようにする。④「道徳教育は日常のあらゆる機会を捉えて行うこと」「評価で、年間の道徳的な見方・考え方の変容をみとるための工夫」「対話的な授業を目指す授業の工夫」などについての研修を、毎年行う。	①道徳教育を通して、自分を大切にし、互いの生き方を認めていく考えを育んできた。②道徳科年間指導計画に沿い、全学級が道徳科の授業公開を年一回以上実施した。③道徳教育や人権教育、また日常生活の中で、自分の考えを書いたり、話したりすることや友達の考えを聞くことを通して、自分自身の見方・考え方を見つめる機会を設けていった。④道徳教育に長年携わっていらした方を講師としてお招きして、今年度は「道徳教育の基礎」として道徳の授業の組み立て方、授業の進め方、道徳教育の評価の導入的な部分を研修した。次年度は、さらにレベルを上げて道徳教育の指導について研修を行っていきたい。	**B**
健康教育	①子ども一人が健康診断や体力・運動能力調査の分析に基づいて、規則正しい生活（早寝・早起きの励行、朝食を食べたり、適度な運動をしたりする等）を送ろうとする姿勢を培う。②「ともキラ班遊び」を通して外遊びや運動の推進を図ることで、健やかな心と体を育み、楽しく体を動かし、たくましく生活できる力を育て集会や定期的に行うことで日常的に取り組む態度を養う。	①横浜St☆dy Naviの体力・運動能力調査データを基に、児童一人ひとりが自分の生活習慣の振り返りと改善点を考えることができた。養護教諭や栄養職員と連携を図り、食育・健康について充実を図ることができた。②ともキラ活動や運動委員会の企画した集会などを定期的に行うことで、休み時間外遊びをする児童が増えてきている。	B
自分づくり（キャリア教育）	①子どもたち自らが積極的に地域と関わることを大切にして、他者との関わりの中で自分の思いを表現しながら一人ひとりが自己有用感を高めるようにする。②「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況や発達段階に合わせてキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、子ども自身の変容や成長を自己評価できるようにする。	①他者と関わるということができていた。ともきら活動やペア学年の取組で、上学年が下学年に教えようとして、他者と関わる意識が育っていた。地域と関わるという点は、もう少し計画的にできるとよかった。町探検や野菜の苗植えで地域の方と関わったりセタク大使をしたり、西くじら応援隊が助けてくれたりして、関わっている場面はあった。しかし、学年や時間が限定的であった。地域の財を生かして、地域と関われるように、教科の中にも落とし込んでいけるとよい。②各学年で、行事のたびに振り返りをしている。学年や発達段階において、方法や内容は異なるが、それぞれで残している。1年に一回しかない行事や学校生活の中で一回しかない行事は単発ではあるが、小学校生活を通して振り返りができるように残してある。また、昨年度よりも「横浜プログラム」を実施して、キャリア形成の一助になっている。次年度以降も継続できるように、各学年で実施した内容を残しておく必要がある。	B
いじめへの対応	①いじめを積極的に認知し、子どもの心情に寄り添う。②月1回定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、認知された案件の対応を丁寧に行うことで再発防止に努める。③いじめ防止研修の他、いじめに関する情報等をこまめに共有して、全職員のいじめに対するアンテナを高くするとともに、年4回の児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制づくりをする。④「いじめ」の未然防止についての話し合いや具体的な活動を通して、子どもたちがいじめ防止に主体的に関わることができるようにする。	①②子どもの心情に寄り添って対応を考えていけるよう、定例のいじめ防止会議の他、学年の救論や頻係救論で日常的に情報共有を行い、子どもに多面的に関わるようにした。③アンケートから、いじめ認知につながることが昨年より増えた。児童がSOSを出すことができる環境を引き続き整えていく。④運営委員会の児童が考えたいじめに関するアンケートで児童が自分の行いをふりかえったり、「カラフルデー」という取り組みを通して互いを尊重する態度を養うなど、児童が主体的に関わることができた。	A
人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の職員を中心にメンターチームを組織し、月1回の活動を継続して行う。メンターチームのメンバーで内容を自ら設定し、学べる体制をつくる。②ICTを活用した事務の効率化や情報の共有化を図るとともに、全職員の組織的な働き方改革につなげる。③中学年では交換授業、高学年は、各担任や専科などで教科を分担して受け持つ教科分担制「チーム学年経営」を行うことで、教材研究や事務処理の時間を確保する。	①メンターチームで活動計画を設定し活動することができた。実技を伴った体育の跳び箱運動の授業の行い方や、理科の実験準備、道徳の授業の進め方など様々な研修を行った。すぐに実践できる実のある研修になった。②Microsoft Teamsアプリを活用することで事務の効率化や情報の共有化を図ることができている部分がある。さらに来年度はTeamsへデータの移行等を検討していきたい。③高学年で教科担任制を取ることで教材研究や事務処理の時間を確保することができた。児童理解が深まっている。	B
縦割り班活動	①縦割り班で遊ぶ活動を5月に行った後、縦割り遠足として海の公園に行き、異学年の交流を進める。②ペア学年の交流を年に2回行うことで、上学年はリーダー性を高め、下学年は上学年への親しみをもつようにする。③年間3回ほど縦割り班集会を行い、各学年の目標を達成していくようにする。④縦割り班を生かして、新体カテストや長縄の活動などを行い、異学年の交流を深める。	縦割り班で遊ぶ活動を、5月に行い、全校で縦割り遠足として海の公園に行き、異学年の交流を進めた。また、縦割り班を生かして、新体力テストや長縄の活動、集会などを行うことができた。さらに、昨年度から始めたペア学年での交流を今年度も行ったことで、より深い関わりをもつことができた。　今後、さらに異学年交流を深めていくために、年間を見通して縦割り班を生かした活動場面を模索し、共有していきたい。	B
GIGAスクール構想	ICT機器を効果的に活用し、個別最適な学び・協働的な学びの実現を目指していく。職員のスキルアップを目指し、相互に情報交換をしていきながら授業や業務への効果的な活用方法を見出していく。児童自ら数ある情報や媒体を自ら取捨選択し、自分の意見や考えを表現していけるよう支援していく。引き続き効果的な活用方法について研修をつみながら児童のみならず、職員のスキルアップをはかり、校務改善にも繋げていきたい。	本校の重点教育研究目標である「自分の思いを表現したり伝え合ったりする子の育成をめざして」を実現するために、日頃の授業の中でICT機器の利用を活発に行い、情報活用能力の育成を目指しながら、個別最適な学びや協働的な学びに繋げることができた。また、職員研修を通してのスキルアップを行うことで、校務改善に繋げることもできた。今後も情報モラル教育を充実させ、児童自身の確かなスキルアップに繋げていきたい。	A
幼保小中一貫	①幼稚園・保育園から小学校へ子どもの育ちと主体的な学びをつないでいくために、1年生が年間を通して近隣の幼稚園・保育園の園児たちと交流をしていく。職員同士もお互い参観に行き来するなどして情報交換をする。②小学校から中学校へつないでいくために、様々な場面で中学生との交流場面を図っていく。小学校児童と中学生と、子ども同士の活動を探っていく。	①保育園・幼稚園の年長との交流を通して、子ども自身ができるようになったことを実感できたり、こうしたい、こうしてあげたいという相手意識をもって活動したりできるようになった。職員同士の交流の中で、年長がどんな活動を経て学校に入学してきたのかがわかり、子どもたち主体で活動できる場面を作ることができた。②小中交流日や職業体験等で交流することができた。運動会延期によって中学生がボランティアに参加できなかったので、来年度実現できるようにしていきたい。	B
ブロック内評価後の気付き	○小中合同で学校運営協議会を行うことで、1年間多くの意見交換が行われた。学校運営協議会で出された意見から具現化された取組もあり、充実した議論の場となった。 ○Y－Pアセスメントの結果を小中合同で分析する等、自己肯定感育成のための授業改善について議論することができた。また、教職員を対象に色弱の方を講師に招き、人権講演会を行った。来年度から人権推進校となるため、教職員の意識も高めることができた。		
学校関係者評価	○学校関係者からの意見も多く、とても有意義な会が運営できているとの評価を受けた。 ○道徳の授業公開はよかったのでぜひ続けてほしい。 ○子どもの育ちを連続的に捉えることができる幼保小中の取組がとてもよい。幼保も小学校の様子を知ることができる。 ○子どもの成長過程でいじめはどうしても起きてしまいがちでいじめを0にすることは難しい。これからも早期発見と適切な対応が必要である。 ○読書については、本を読む、読まない児童と二極化していると感じる。 ○報告書が簡素化されていくのはよい傾向であり、働き方改革に繋がっていく。		
中期取組目標振り返り	・日頃の授業の中でICT機器の利用を活発に行い、情報活用能力の育成を目指しながら、個別最適な学びや協働的な学びに繋げることができた。 ・アンケートから、いじめ認知につながることが昨年より増えた。児童がSOSを出すことができる環境を引き続き整えていく。 ・重点取組分野の目標に向けて進捗状況を確認しながら学校運営をしていきたい。		

重点取組分野	令和 8 年度 具体的取組	令和 8 年度 自己評価結果	総括
授業改善	①各単元や各授業の中で、「主体的・対話的で深い学び」の子どもの姿を想定し、それに迫る手立てを考え、子ども自らが学習の方法や場を選択し、考えを説明し合えるような仕掛けの工夫を考える。②重点研究テーマや学校教育目標の実現にむけて、自分の思いを表現したり伝え合ったりする子の育成をめざす。		
道徳教育	①豊かなかかわりの中で、自分を大切にし、互いの生き方を認めていく考えを育てるため、道徳科を要として学校の教育活動全体を通して行う道徳教育を推進する。②道徳科年間指導計画に沿った、全学級の道徳科授業公開を年一回以上実施する。③自分の考えを書いたり、話したりすることや友達の考えを聞くことを通して、自分自身の見方・考え方を見つめたり、なりたい自分をイメージしたりすることができるようにする。④「道徳教育は日常のあらゆる機会を捉えて行うこと」「評価で、年間の道徳的な見方・考え方の変容をみとるための工夫」「対話的な授業を目指す授業の工夫」などについての研修を、毎年行う。		
健康教育	①子ども一人ひとりが健康診断や体力・運動能力調査の結果に基づいて、規則正しい生活（早寝・早起きの励行、朝食を食べたり、適度な運動をしたりする等）を送ろうとする姿勢を培う。②ともキラ活動を通して外遊びや運動の推進を図り、健やかな心と体を育む。楽しく体を動かし、たくましく生活できる力を育て、「ともキラ班遊び」や集会などを定期的に行うことで、日常的に運動を取り組む態度を養う。		
自分づくり（キャリア教育）	①子どもたち自らが積極的に地域と関わることを大切にして、他者との関わりの中で自分の思いを表現しながら一人ひとりが自己有用感を高めるようにする。②「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況や発達段階に合わせてキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、子ども自身の変容や成長を自己評価できるようにする。		
いじめへの対応	①いじめを積極的に認知し、子どもの心情に寄り添う。②月1回定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、認知された案件の対応を丁寧に行うことで再発防止に努める。③いじめ防止研修の他、いじめに関する情報等をこまめに共有して、全職員のいじめに対するアンテナを高くするとともに、年4回の児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制づくりをする。④「いじめ」の未然防止についての話し合いや具体的な活動を通して、子どもたちがいじめ防止に主体的に関わることができるようにする。		
人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の職員を中心にメンターチームを組織し、月1回の活動を継続して行う。メンターチームのメンバーで内容を自ら設定し、学べる体制をつくる。②ICTを活用した事務の効率化や情報の共有化を図るとともに、全職員の組織的な働き方改革につなげる。③中学年では交換授業、「チーム担任制」、高学年は、各担任や専科などで教科を分担して受け持つ教科分担制「チーム学年経営」を行うことで、教材研究や事務処理の時間を確保する。		
縦割り班活動	①縦割り班で遊ぶ活動を5月に行った後、縦割り遠足として海の公園に行き、異学年の交流を進める。②ペア学年の交流を年に2回行うことで、上学年はリーダー性を高め、下学年は上学年への親しみをもつようにする。③年間3回ほど縦割り班集会を行い、各学年の目標を達成していくようにする。④縦割り班を生かして、新体カテストや長縄の活動などを行い、異学年の交流を深める。		
GIGAスクール構想	ICT機器を効果的に活用し、個別最適な学び・協働的な学びの実現を目指していく。職員のスキルアップを目指し、相互に情報交換をしていきながら授業や業務への効果的な活用方法を見出していく。児童自ら数ある情報や媒体を自ら取捨選択し、自分の意見や考えを表現していけるよう支援していく。引き続き効果的な活用方法について研修をつみながら児童のみならず、職員のスキルアップをはかり、校務改善にも繋げていきたい。		
幼保小中一貫	①幼稚園・保育園から小学校へ子どもの育ちと主体的な学びをつないでいくために、1年生が年間を通して近隣の幼稚園・保育園の園児たちと交流をしていく。職員同士もお互い参観に行き来するなどして情報交換をする。②小学校から中学校へつないでいくために、様々な場面で中学生との交流場面を図っていく。小学校児童と中学生と、子ども同士の活動を探っていく。		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			

重点取組分野	令和 9 年度 具体的取組	令和 9 年度 自己評価結果	総括
授業改善			
道徳教育			
健康教育			
自分づくり（キャリア教育）			
いじめへの対応			
人材育成・組織運営(働き方)			
縦割り班活動			
GIGAスクール構想			
幼保小中一貫			
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			